
トライメイト

イタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライメイト

【Nコード】

N4696G

【作者名】

イタカ

【あらすじ】

時刻は22時。夜中の誰もいない学校で、選ばれし者たちがゲームを始めます。
トライメイト

選ばれし者

目が覚めると、そこは見慣れた学校の教室だった。

「なんで俺、こんなところに……」

不思議だった。

外は暗闇に包まれ、真つ暗だ。教室の中は月の光があるからか、辛うじて周りが確認できる。時刻は、22時。

俺は不思議でしかなかった。

俺は18時に家に帰り、21時頃に仮眠をとろうと部屋のベッドで寝たはずだ。

そのはずなのに、何故か今俺は学校の教室にある自分の机に座っている。

「まさか……夢遊病！」

そんなわけなかった。家族から自分が夜中歩き回ってるなんて聞かないし、もし夢遊病だとしても家から2kmも離れたこの学校まで歩いてくるわけがない。そんなわけないと信じたい。

「じゃあ何でこんな教室なんかに……」

誰も答えてくれるわけがないのに問いかけてみる。

やはり誰からも返答はない。

「帰るか」

俺は椅子から立ち上がり、教室のドアに手をかけた時だった。

『ガ、ガガ、ガ、ガ、ビー！』

「……………！」

スピーカーから壊れた機械のような音が聴こえてきた。

周りの空気が一気に3度くらい下がったように冷たくなった。

俺の頬を、汗がつつたう。

金縛りにあつた時みたいに体が硬直して動かない。

時間が、心臓が、何もかもが止まっているような、気持ち悪い感覚が俺を襲う。

やばい。気持ち悪い。教室には俺しかいないはずなのに、そこらじゅうから視線を感じる。いったいなんなんだよ……………！
その時、またスピーカーから音が聴こえはじめた。

『ガガ、ガ、ビ……………諸君聴こえるかい？私は……………そうだな、キラと名乗っておこうか』

変声機を通されたような声がスピーカーから聴こえてくる。

「諸君……………？」

諸君と言うことは、この学校には俺以外にも人がいるということだ。しかし、キラって。漫画の影響受けすぎだろ。

『今キラにツツコミ入れたヤツ！絶対いるだろ！そうだよ諸君の想像通りだよ！……………すまない取り乱してしまった。ちなみにこの声は変声機ではなくヘリウムガスだ！』

キラさんに怒られてしまった。つーか何でヘリウムガスなんだよ変

声機使えよ。

「さて、そろそろ本題に入ろうか。今この学校には100人の選ばれし者達がいる。この放送を聴いている諸君のことだ。諸君に、殺し合いをしてもらう！」

「殺し、合い？」

ドアを開けて

こいつは何を言ってるんだろうと思った。
殺し合い？ふざけるな。乱おこしてるような江戸時代とは違っただぞ。

『諸君、服のポケットの中を見たまえ』

キラからの指示だ。

ポケット？何か入ってるのだろうか。

俺は服のポケットを探す。

いろいろあつて気がつかなかつたが、俺は学校の学ランを着ていた。道理で首の周りが苦しいはずだ。

ポケット1つ1つに手を突っ込んで中身を確認する。

すると学ランのズボンの右ポケットに折り畳まれた小さな紙が入っていた。その紙を開くと中には数字がかかれていた。

「28……?」

『さて諸君。ポケットの中には1枚の紙が入ってるはずなのだか、見つけてくれたかな?』

スピーカーから再びキラの声が聞こえてくる。

『紙には数字が書いてあるはずだ。その数字は1から50までである。諸君は100人いるわけだから必ず被る数字があるのは諸君にもわかるだろう。その数字が被った者とペアを組んでもらう！とりあえずペアを探して、そのペアと一緒に23時までには体育館に来たまえ。1秒でも遅れたら、その時点で2人とも失格だ。それでは、体育館

で会おう』

ブツ……………とスピーカーから電源を切った音が漏れる。ペアを組む？同じ数字の奴と？

そんな初対面の奴とペアを組んでなんかやるとかキラはふざけてるんだろうか。

まあこんな変なゲームみたいなことやろうとしてるんだから、かなりふざけた奴なんだろうけど。

「クソ…………とりあえずペアの奴探しに行くか」

俺は再び教室のドアに手をかけ、ドアを開ける。

男と少女

ドアの向こうはいつも見る廊下が広がっている。これといってなにも変わったところはない。

俺はその廊下を東に向いて歩き始めた。

その時、俺のいた教室の隣の教室から1人の男が飛び出してきた。20代半ばくらいだろうか。その男は顔を真っ青にして目を見開き、ガクガク震えながら俺に目を向け、口を開いた。

「きつ……きみは何の《効果》^{エフェクト}なんだ？」

《効果》？

なにを言っているんだろうか。「えと、何のことですか？《効果》って」

俺が問うと男は青い顔をもっと青くした。

「きみは、《トライメイト》じゃない……のか？」

「《トライ、メイト》？」

何のことだ？

《効果》とか《トライメイト》とか、俺は全く理解出来ない。

……まさかここは、俺がいつも生活している世界ではないのか……？でもそんな、非現実的なことが起こるわけない。バカだな俺。一瞬でもそんな考えが頭過るとか。そうだ！きつとこれは夢なんだ。ちよつとリアリティがある夢なんだ。覚める！覚める！夢よ覚める！

「残念ながらこれは夢ではありません。きみがそう思うのもわかり

ますが、これは現実です」

この人……なんで俺の考えてることがわかるんだ？俺の表情に出てる？いや、そういうののプロじゃなければそんな簡単にわかるわけがない。じゃあ、なんで……

「僕の《効果》は《読心》です。人の顔を見るだけでその人考えていることから健康状態まで読み取れます。さつきから君の心を覗いてますが、君は本当に《トライメイト》じゃないんですね……」

男は俯いて声を小さくしていく。目を泳がしながら、ブツブツとにか言っている。そのまま少しずつ時間が過ぎていく。

「23時までだったよな……」と俺は時間が気になり、携帯を探してポケットに手をつっこむ。内ポケットから携帯を出し時間を確認すると、既に22時32分だった。

「あの、俺、そろそろ行かないと……時間が……」

「君は体育館に行つては駄目だ。今すぐ、ここから出て行きなさい」男はしっかりとした口調で、俺の目を真っ直ぐ見て言った。

「《トライメイト》でない君が、ここにいるのは危険過ぎる。キラのことだ。何をしてくるかわからない。せめて、君のペアが僕なら良かったんだが……」

クソツと男は唇を噛んだ。

「えと……あなたの番号は、なんなんですか？」

俺は思いきって聞いてみる。男は俺の心を読んでいるから俺の番号がわかってるのだろうが、俺にはわからない。

「13だ。君は、28だろ？」

俺は思わず口を半開きにして固まってしまった。《効果》が《読心》だというのはさっき聞いて知っていたはずなのに。心のどこかで嘘だと思っていたのだろうか。

「……とりあえず、番号が違うことはわかっただろ？だから早くここから出ていきなさい」「それは困るわね」

不意に後ろから女の高い声が聞こえる。俺は驚いて振り向く。そこには露出度高めの、どうみても季節外れな服をきた少女が仁王立ちで俺達2人を睨みつけていた。

「男……学ラン着てる方、28番なんですよ？私のペアなんだから、勝手に出ていかれたら私が困るわ」

つん、と顎を突き上げ俺達を睨み付ける。

なんて自分勝手な女だろうと思うと同時に、不謹慎ながら可愛いなとも思ってしまった。睨まれていても嫌な気がしない。……どうやら俺はMだったみたいだ。

「ちょっと、私の話聞いてる？なんか反応してよ。まあ、学ランくんは私と体育館に行くんだから反応なんて必要ないけど。もう1人の方には用ないから。消えて」

冷たい視線と言葉が矢のように飛んでくる。俺はかすり傷で済んだ

が、もう1人には突き刺さってしまったかもしれない。

「……………ダメだ。カレは普通の人間だ。《トライメイト》じゃない。」男がやつとのこと言葉が発した。緊張しているみたいに声が震えている。俺も体が動かない。女のオーラがそれだけ強大ということか。

「《トライメイト》じゃ、ない？」

女は眉間に皺をよせ、俺をじろじろと舐め回すように見つめる。そして考えが整理出来たのか、1つため息をついてキュッと口角をあげ上目遣いでこちらを見る。

「おじさん。私をはめたいのなら、もっと上手く嘘つくのね。2人じゃなきゃ失格っていうルールを利用したんだろうけど見え見えよ？」

話しながら、少しずつ女が近づいてくる。さっきの笑った顔はもうなく、大きな目はこちらをギロツと睨んでいる。

「さあ、その学ランくんをこっちに渡して？おじさん……………」

一歩、また一歩、女が歩くたびに辺りにコツツというブーツの音が響く。男は

「あ……………が……………」と声も出ないようだった。俺も足がすくんで動けなかった。コツツ……………と足音が止む。

女は俺と男の1メートル手前くらいに仁王立ちして、こちらをジロツと睨んでいる。

何故だ……………女は俺や男よりはるかに小さく150センチメートル程度しかないだろう。細身で手首なんかは骨と皮だけなのではないか

と思うほどである。なのに何故、俺も男も動けないのだろう。この女は一体、何者なのだろう。

「動けないの？はっ！情けないわね。まあどうでもいいけど。さ、学ランくん、一緒にきてくれるよね？」

「お……お前に、彼は渡さない……」

男が声を喉から絞りだしたのが俺にもわかった。会った時以上に青白い顔をしている。

「おじさん……アンタにはね、関係ないの。私は学ランくんに聞いているの。あんまりでしゃばると、痛い目見るわよ……」

女が目を見開き、ポケットからカッターナイフを取り出す。

「ひ……っ」っと男が息を飲む。

「刃物って血がつくから好きじゃないんだけど、仕方ないわね」

ジギジギジギ、とカッターの刃が出る音が響く。

ヤバイ。これはヤバイ。俺はともかく、この男がヤバイ。目の前の女に、殺される。それを防ぐには……。

「お、おい。落ち着け……俺が、行けばいいんだろ？この人は関係ないんだろ？俺があんたと一緒に体育館に行く、それでいいだろ？」

「きつきみ！なに言って」

「ええ、それでいいわ。おじさんは見逃してあげる。今だけ、だけどね……」

ニヤツと微笑み、俺達に背を向け歩きだす。俺も行かなくては。

「おじさん、迷惑かけてすいませんでした。それじゃ俺行きます」

男にそう言い、俺は女の背を追いかける。

「きみは、絶対に後悔するぞ！」

後ろから男の声が聞こえたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4696g/>

トライメイト

2010年10月9日06時27分発行